

高級車と緑あふれる街 アブダビ(アラブ首長国連邦)

アブダビ日本人学校長 小川雅弘



1 アブダビについて

私がアブダビに着任した当初、驚いたことが二つある。

一つ目は、アブダビではフェラーリ、マクラーレンなどのスーパーカーをよく見かけることである。ポルシェやベンツ、BMWなどはふつうにたくさん走っていて、高級車というイメージはかなり薄れてしまった。ベンツ（ときにはランボルギーニでさえ）がショッピングモールのセールの特賞品となる地域柄である。

二つ目は、街に緑がとても多いことである。道路沿いには街路樹、公園には芝生や花壇、樹木などが整備され、手入れも行きとどいている。夏には気温が50℃にせまり、年に数回しか雨が降らない砂漠の国とは思えないほどである。

アブダビを緑であふれる街にするために、ホースを地面にめぐらして樹木や花に水を供給し、毎朝スプリンクラーで芝生に撒水している。そして、公園や街路樹のそばでは緑の制服を着た作業員が黙々と花を植えかえたり、芝を張りかえたりしている。水はもちろん海水を電気で淡水化した水である。人工的に作り出した水をまいたり、多くの作業員が植物の手入れをおこなったり、これらの緑を維持するためにどれだけのお金が使われているのかと思わず感心してしまう。この国では緑はたいへんなぜいたく品である。

アブダビはアラブ首長国連邦（以下UAEと略す）の首都である。UAEは建国43年の若い国で、7つの首長国からなる。そのうちの一つであるアブダビ首長国はUAEの国土面積の約80%をしめ、石油産出による豊かな経済力によりUAEをリードしている。そのため、UAEの大統領にはアブダビの首長が就任している。アブダビに緑が多いのは、前アブダビ首長兼前大統領が石油から得た収入を社会資本の整備に投入した表れだといわれている。真実のほどはわからないが、ドバイに向かうハイウェイを走っていて街路樹が途切れるところがアブダビ首長国とドバイ首長国との境だといわれるほどだ。

アブダビの街はとても近代的である（写真①）。1950年代に大きな建物といえば今も街中にあるカスルアルホスン¹だけだったと聞いている。その後の石油開発とともに、現在のような街並みが築かれてきた。そして、2000年代に入ってF1を開催するヤスマリーナサーキット、フェラーリワールド、シェイクザイドグランドモスクなど、アブダビを代表する施設が建設された。現在もあちこちで高層ビルが建設中で、ルーブル美術館分館〔現在建設中〕やグッゲンハイム美術館、国立博



写真① アブダビの街並み

物館など文化施設の建設も予定されている。

これらの建設や街の中の各種のサービスを支えるのは、UAEに働きに来ている人々である。アブダビの人口の約80%が外国籍の人々といわれている。市街地では夕方になるとどこからともなく人があふれ出す。南アジア系住民を中心に、アフリカ系住民、ヨーロッパ系住民、東南アジア系住民などいろいろな民族が入りまじっている。まさに「人種のサラダボウル」という言葉を体感できるような街である。

そのような市街地から内陸に1時間ほど車で走ると周囲のようすが一変する。主要幹線の道路沿いには緑があふれているものの、少し間道に入れば、わずかに灌木や草が生えているだけの砂また砂の世界である。途中にはラクダの飼育場があったり、デーツ（ナツメヤシ）を栽培する農園があったりする。砂丘を4WD車で上り下りするデザートサファリは、まさにジェットコースターそのもので、アブダビ観光の目玉でもある。砂漠に沈む夕陽、満天の星はとてもすばらしく、感動的である。

2 アブダビ日本人学校について

アブダビ日本人学校は1978年に設立され、現在の校舎に移転してから3年近くなる。現在の校舎の場所はアブダビ島にある街の中心部により近くなった。以前女子校だった校舎を借りて使用している。夏だけでなく冬でも校舎（体育館も含む）内は一日中エアコンがきいている。これは冬でも20数℃の気温であることに加え、海に近く湿度がきわめて高いからである。エアコンが一年中きいているのは、この校舎に限ったことではなく、アブダビ内のどこの建物、どこの家庭でもほぼ同じである。灼熱の国ではあるが、逆に日本の夏よりもしのぎやすいという一面ももち合わせている。

アブダビ日本人学校は、日本人学校のなかでは数少ない幼稚園併設の学校で、小中学部

に48名、幼稚園

に28名が在籍す

る（平成27年1

月現在）。この

うち、小学部に

10名のナショナル児童、幼稚園に8名のナショナル園児がいる。ナショナル児童・園児とは、当地アブダビ出身の児童・園児で、アブダビ皇太子府からの強い要請により2006年から受け入れを始めた。幼稚園の年少から入園し、日本語に慣れてから小学部に入学するという形をとっている。

ナショナル児童・園児を受け入れていることで、日本語指導などたいへんな面もあるが、それ以上に得られるものが多いと感じている。

例えば、本校の昼食は家庭から持参する弁当であるが、動物をかたどったおかずなどが入っている日本人児童の弁当には、ナショナル児童の関心がとても高いようである。弁当の中身一つをとってまがいの国の食文化理解につながっている。

また、ナショナル児童はラマダン（断食月）になると小学2、3年生あたりから水や昼食をとらない練習を始める。ラマダン期間中は、ナショナル児童やイスラム教徒の現地採用職員の前では、日本人児童生徒も職員も水を飲まないように気をつけている。現地の習慣を尊重し仲間を思いやる気持ちを育てているのである。

さらに、ナショナルデー（独立記念日）の前後には、ナショナル児童が中心となってUAEの歴史や習慣、文化などを紹介するイベントがおこなわれる。日本人児童生徒の現地理解教育に大いに役だっている（写真②）。

このようななかで、児童生徒は、国際感覚をみがき、将来、国際社会で活躍できるグローバル人材としての基礎を学んでいる。